

「天地人」

新潟県出身の火坂雅志^{ひさかまさし}先生の原作で、平成21年の大河ドラマ「天地人」は、初回放送から歴代の大河ドラマの中でも、第5位という高視聴率でスタートいたしました。主人公は、直江兼続。この直江兼続を大河ドラマにしたいと活動し続けた関係市町村では、のぼり旗がはためき、天地人博も開催され 大いに盛り上がっております。

主人公の直江兼続公と新潟県について触れてみましょう。

越後で有名な武将と言え上杉謙信公が思い浮かぶ方も多いのではないせしょうか。男のこが生まれればお世継になる 女のこが生まれれば戦略の具になる戦国時代に、謙信公は、禅^{ぜん}の教えを志し、生涯^{おくがた}奥方を持たなかった人物でございます。

謙信公の姉・仙桃院^{せんとういん}は不慮の事故で夫をなくし、若くして坂戸城主となった息子の景勝公を謙信公の養子としました。そして、謙信公は、小田原の北条家から人質として捕らえたもう一人の養子を迎え入れておりますが、謙信公はこの子をとても可愛がり、自分の幼少の頃の「景虎」という名前まで付けたほどでした。

口数が少ない景勝を心配した母・仙桃院^{せんとういん}は、坂戸城下 上田の庄で生まれた（のちの直江兼続）樋口兼続を、景勝^{そつきん}の側近といたしました。

兼続は、景勝より5歳年下でございますが、坂戸城下で遊んだり、剣術を習ったり、麓の雲洞庵で学問をよく学んで、ともに大きく成長していったのでございます。これが一生涯を一心同体のように過ごした、二人の出会いなのでございます。

天正6年、上杉謙信公が49歳の若さで急に亡くなってしまうと、景勝公ともう一人の養子景虎との間で 跡目^{あとめ}争い^{あらそ}「お館の乱」^{たて}がおこり、ここ越後を二分^{にぶん}にした戦いで この魚沼地方も戦火にさらされたのでございます。このお館の乱に勝利して、上杉謙信公のあとを継ぐことになった景勝公は24歳 兼続公19歳だったそうでございます。

ところが、この「お館の乱」の恩賞をめぐるトラブルが起り、景勝公の家臣だった与板城の直江信綱^{のぶつな}が不慮の死をとげてしまい、残された妻のお船^{せん}をかわいそうに思った景勝公は、後継ぎのない直江家へ兼続^{むこ}を婿養子とさせ、直江家の断絶^{だんぜつ}を防いだのです。ここで初めて、直江兼続の誕生となり、お船は、兼続より一才年上でしたが、陰でよく夫を支え、兼続は一人

も側室そくしつを持たなかったと言われております。

直江兼続公は主君しゅくんの景勝公を上回る知恵の持ち主で、有力武将から「家臣かしんになれ」という誘いが絶えなかったと言われております。けれども上杉謙信公の誠心せいしんを貫いて主君しゅくんである景勝を裏切ることはなく、生涯を共に過ごしたのでございます。

（上杉家会津へ）

そんな2人は、豊臣秀吉によく信頼され、慶長3年、会津120万石へ国替えを命じられました。

秀吉は、何人もの側近がいたと言われておりますが、なかなか子どもには恵まれず、57歳にして、やっと男の子が誕生いたしました。名前は秀頼ひでよりといい、秀吉は、自分が死ぬ前に

五大老ごだいろうという制度を作り、上杉景勝公や徳川家康など有力な五人の大名を定め、自分の死後

も息子の秀頼ひでよりを補佐させ徳川たいとうの台頭を防ごうといたしました。しかし秀頼ひでより3歳の時、

太閤殿下たいこうでんかである秀吉が亡くなってしまうと、徳川家康は、その年のうちに有力大名を頻繁ひんぱんに

訪問したり、縁組えんぐみを次々実行したり、ことごとく五大老ごだいろうの決まりを違反繰り返し、自分の天

下取りかどの為に動きまわったと言われております。

そんな行為に不満を持ちながらも、会津への国替えを命じられたばかりの上杉家は、道路を整備したり、橋をかけたり、今までの若松城では手狭てせまであった為、近くに大規模な新しいお城を築いたり、国主こくしゅとして忙しく働いておりました。

そんな動きを聞きつけた徳川家康は、人を集め、新しく城を築き、軍事力を高めているのは、徳川と戦う為ではないかと思いはじめたようでございます。

疑いを持った家康は、景勝公の家臣かしんである兼続公にお手紙を出したのでございます。

「上杉さん！あなた方は、最近、新しくお城を建てて、道も整備して、人も集め、武具ぶぐを揃えていると言うではないか！もしや謀反むほんをたくらんでいるのではなからうか？もし、たくら

んでいないト言うのであれば、自分のやりすぎた行為をとがめて上洛（京都へきて）して、自分のとった行動を説明したうえで、誓いの文章を出されよ！」

しかし、上杉家は、説明に行くどころか挑戦的で嫌味なお返事を書き、家康を怒らせたと言われております。それが、世に伝わる「直江状」と呼ばれるもので、その内容をご紹介させていただきますと・・・

「家康さまへ 景勝の上洛が延びているのは、家康さまに逆らっているのではなく、昨年国替えをしたばかりで、忙しいのでございます。

道の整備も、城を新しくするのも、人を集めるのも、国を便利にする為に、国主としては当然のことはしたままでございます。

武具？ええ集めていますとも。上方の人は、茶器などを集めてつつつを抜かしておられるようだが、茶の道具では、戦はできませんので、何か起こった時にはいつでもすげだちいたそう。わたくし達は田舎武士につき武具を集めておりますが、それはお国柄の違いとでも思ってください。

上洛いたせと申されるが、簡単に京都へ来いと申されましても、なにぶん会津は雪国でして、冬場は何も出来ないゆえ、信憑性のない疑いをかけられたくらいではすぐに京都へ行く事は出来ませぬ。うちの景勝を謀反だなどと申すのなら、秀吉さまが亡くなって1年もしないうちにその誓いを破って諸大名と縁組したと言う者は、どこのどなたであろう？その者を取り調べてみてからにしていきたい」

この内容は、家康の要求を否定ししかも家康の行動を的確に非難したものであったようでございます。

この「直江状」の写しは、新潟県立歴史博物館（長岡市）が所有しておりますので、ご機会ございましたらお訪ねくださいませ。

(上杉家米沢へ)

この「直江状」に激怒した家康は、上杉征伐のため会津へ向かいますが、その途中、現在の栃木県小山市まで来ると、豊臣側の石田三成が兵をあげたところを知り、関ヶ原に引き返したのでございます。

結局、石田三成はこの戦に敗戦してしまい、豊臣側に味方した上杉家も会津120万石を没収されるに至り、米沢30万石へ移封させられるのでございます。

その時、上杉家は120万石の家臣団を一人もリストウすることなく、米沢30万石に移動し、米沢城下は一気に8倍近くに人口が急激に増加したため、急いで城下の整備を進めたのでございますが、この時の総責任者が兼続公だったと言われております。

城下の整備は、天災から町を守る石積みていぼうの堤防を築き、また、近江から鉄砲鍛冶おおみ てっぽうかじを呼び寄せ「上杉の雷筒」と呼ばれる鉄砲製造を奨励し戦争からも町を守る手配も行われたのでございます。

また、文武両道の武士であったと言われております兼続公は、自ら集めた書籍しょせきを基に「禅林文庫」という図書館を禅林寺ぜんりんじに作らせ米沢藩士の教育にも力を注いだのでございます。

生涯に渡り主君景勝を支え続けた兼続は、元和5年(1619)60歳でその生涯を終え、現在も米沢市林泉寺りんせんじで、妻お船せんと眠っているのでございます。

(昭和13年米沢市松岬神社まつがさき ぶんしに分祀されています。分祀=他の神社に分けてお祀りすること)

上杉景勝公と直江兼続公は、自分から仕掛ける戦いくさは一度も行ったことがなく、民衆を守るための政治を行った名武将で、領民にはとても愛されすぐれた政治家だったと言われております。